

## プロクルステスになるなかれ！

心理学助教授 佐方 哲彦

心理学を学んでいると、ここそこでギリシア神話をモチーフにしてできた言葉に出くわす。だからというわけでもないが、私はギリシア神話をはじめ各国の神話や伝説の類を読むのが好きである。その中には、人間の様々な原型的な心性を見出すことができるので、難解な理論を振りかざしたり下手な説明をするよりも、一つの物語を紹介したほうが、ずっとよくわかってもらえることもある。

さて、今日は君たちにプロクルステス *Procrustes* の話をしよう。知っている人がいるだろうか。プロクルステスというのは、ギリシアのアッチカの地、アテナイへ向かう山間の街道に出没した悪名高い山賊のことである。彼は、旅人を捕らえてきては鉄製のベッドのところへ連れて行き「もしおまえがこのベッドにぴったり合うようならば、命だけは助けてやろう」といって、旅人をその鉄のベッドに寝かせた。そして、その旅人がベッドよりも大きすぎてもみ出せば「わしが合わせてやろう」と、はみ出した身体の部分を切り落とし、小さければ「合うように、引っ張ってやろう」といいながら、引き裂いて殺したということである。一説によれば、鉄のベッドは大小2つあり、大きい人には小さなベッドを、小さい人には大きなベッドを当てがったともいわれるが、いずれにせよ彼に捕らえられ生きて助かる者は誰一人としていなかったと伝えられている。彼は、決して合うはずのない冷たい鉄のベッドに、「親切にも」人間のほうを無理矢理合わせて殺したのである。このことから、ある基準に無理矢理暴力的に従わせようとするものの例えとして「プロクルステスのような *Procrustean*」という英単語があるくらいである。しかし、このプロクルステスも結局は英雄テセウスに同じやり方で殺されることになる。

「プロクルステスになるなかれ！」というのは、私が心理カウンセリングをしているときに自戒の意味を込めて自らに言いかせる言葉である。つまり、自分の価値基準を絶対視して相手に押しつけたり、相手が変わることを期待しすぎたり、また関係性のこじれの原因を相手の中だけに求めようとしたりすることへの教訓として、この物語を思い浮かべたりするのである。

医師になろうと入学してきた君たちに、このギリシア神話から何かを感じてくれることを期待しながら、挨拶代わりに「プロクルステスになるなかれ！」の言葉を贈りたいと思う。